

第1回アジア気象会議（ACM：Asian Conference on Meteorology）の報告

2015年10月26日～27日の日程で、標記会議が京都大学を会場に開催された。この会議は、2005年の日本での開催以来、日中韓3国の持ち回りで実施されてきた国際会議の2巡目終了を機に、その後継として計画・実施されたものである。減少傾向にあった参加者数を増加に転じさせるための魅力ある会議への改革を志向しつつ、アジアにおける気象学研究を日中韓3国が協力して牽引しようという試みの一環と位置づけられた重要な会議であった。前者の具体策としてセッションを絞り専門性を高めることにより発表の学術的レベルの向上を図ったこと、後者については「共著者に日中韓いずれかの気象学会員を含めばよい」と参加条件を緩和したなどが大きな改革点であった。幸い194名の参加（発表192件）を得て（第1図）、減少に歯止めをかけることができた。参加者の内訳は、日本69名、中国58名、韓国61名、インドネシア1名、米国3名、英国1名、オーストラリア1名であった。中国・韓国から開催国の日本と同程度の数の参加があり、発表件数で日本を上回ったことは特筆すべきである。会議のプログラムとabstractは気象学会ホームページ <http://metsoc.jp/ACM2015/> で公開されている。なお、proceedingsは刊行されないが、代わりにSOLAの特集号が編集され、掲載料の半額が日本気象学会から補助される予定である。

会議は、26日午前の総会合議から始まり、日本気象学会理事長の新野 宏教授、中国気象学会副会長の胡永云（Yongyun Hu）教授、韓国気象学会会長の安重培（Joong-Bae Ahn）教授の挨拶があった。続い

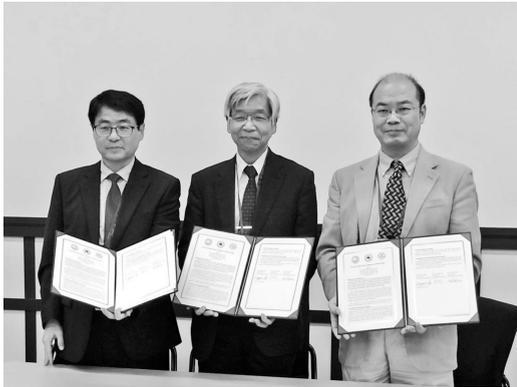
て3件の招待講演が行われ、最初に日本気象学会の津田敏隆教授が Characteristics of atmospheric gravity waves in the middle atmosphere observed with radars and GPS radio occultation と題した講演を、続いて中国気象学会の胡永云教授が Anthropogenic forcing on the Hadley circulation in CMIP5 simulations と題した講演を、最後に韓国気象学会の孫炳柱（Byung-Ju Sohn）教授が Recent Walker circulation changes seen from satellite measurements, CMIP and AMIP simulations: The role of static stability と題した講演を行った。いずれも、3国の気象関係者にとって関心の高い話題で、活発な質疑が行われた。

午後からは3会場に分かれて一般セッションが行われた。開催されたセッションは、1. Modeling and analysis of climate change and monsoons, 2. Regional air pollution under changing climate, 3. Climatic role of the middle atmosphere であった。各セッションは、各学会1名以上のコンビーナにより組織され、事前にコンビーナ間の意思疎通を十分に図って準備したことも、参加者数増加に貢献したと考えられる。日本気象学会からのセッションコンビーナは、1. 渡部雅浩（東京大学）、2. 竹村俊彦（九州大学）、3. 河谷芳雄（海洋研究開発機構）・藤原正智（北海道大学）の各氏であった。

会議初日のレセプション後に3学会の代表者2-3人ずつが集まり、ACMに関する議定書（protocol）について議論した。2009年に合意されたものの確定に



第1図 初日午前の全体会合後に撮影された参加者の集合写真。



第2図 ACMに関する議定書にサインした3国代表。左から順に安韓国気象学会会長，新野日本気象学会理事長，胡中国気象学会副会長。

至らなかった日中韓合同学会の議定書をベースとし、事前の意見交換を踏まえた改訂が加えられた案が諮られたため、3学会の代表者のサインにより正式な議定書として確定させることができた（第2図）。これは大きな前進である。それによれば、3国それぞれ2-3人で組織される国際組織委員会（IOC）により次回の会議について議論し、アメリカ気象学会（AMS）

やアジア・オセアニア地球科学会（AOGS）などのように、他の国際組織の参加を促進するため、日中韓以外の科学者を招待することなどが規定されている。また、付属文書では2年毎に3国の持ち回りで開催することと、セッションや招待講演、旅費のサポートなど実務的要領が定められている。

今回の ACM は2017年10月に韓国の釜山で開催することが韓国気象学会から提案され、了承された。セッションのテーマは IOC により今後議論されるが、日本気象学会からも多くの会員が参加されることを期待している。気象学会の国際的連携という観点からは ACM に留まらず、International Forum of Meteorological Societies (IFMS) という組織の活動が本格化されようとしている。アジアおよびそれを越えた規模で日本気象学会の果たす役割を真剣に考えるべき時期が来ており、次の時代を担う若手会員の積極的な関与が期待される。最後に、今回の会議を成功に導くため多大な貢献をして下さったコンピーナの方々および京都大学大学院理学研究科地球科学輻合部の皆さんに謝意を記したい。

（理事長：新野 宏）

（国際学術交流委員会：長谷部文雄・余田成男）